

<連携プロジェクト> 領域「健康」からだの動き

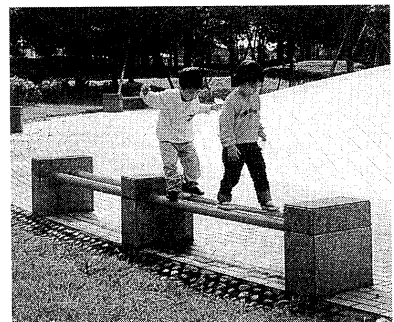
1. 子どもたちのからだの現状から

近年、食生活の変化等により子どもたちの体格が向上している反面、体力や運動能力については低下傾向が続いており、憂慮すべき状況にあると言われている。また、都市化の進行、生活の利便化等により、子どもの遊びの形態が著しく変化し、日常生活の中でもからだを動かす機会や場が減少している現状である。各発達段階に携わる保育者や教師達は、近年の子どもたちのからだの育ちが異変していることを憂慮しており、研修会等でも話題となることが多い。そこで、近年の子どもたちのからだの特徴や気になること、以前とは変わってきていると感じること、体力・運動能力測定の結果、生活環境の実態等について「子どものからだの育ち」という視点から考えてみたい。

どこがおかしい??子どものからだ

乳幼児期では・・・

- ・ ハイハイをしない子が多い。
- ・ ベビーカーの普及でおんぶをする機会が少ない。
- ・ 冷暖房完備の中にいるので、新陳代謝が低く体温調節ができにくい。
- ・ 保護者が極端にけがをおそれて過保護である。
- ・ 外で遊んだり、歩く機会が少ない。
- ・ 子ども中心でなく大人中心の生活である。 など



「おとっと…」(3歳児)

幼稚園では・・・

- ・ 戸外の遊びをしたがらない。自分の好きな遊びを見つけられない子が多い。
- ・ 保護者が子どもの荷物を持ってしまうなどと過保護で、子どものけがに対して過剰な反応を示す。
- ・ 歩き方がぎこちなく、転びやすい。転んでも手が出ないので顔や頭のけがが多い。また同じようなけがを繰り返す子がいる。
- ・ 遊びの経験が少なく、危険を予測できない。
- ・ 朝からあくびをしていたり、不規則な排便、食生活の乱れなどで、登園後しばらくの間ボーッとしていたりイライラしている子がいる。
- ・ 着替えがうまくできない、ボタンが留められない、おはしが使えないなど、手先の不器用な子が目立つ。 など

小学校では・・・

- ・ ぶつかって転倒し骨折するというけがが多い。
- ・ 成長痛を訴える子が増えてきている。

- ・ 朝からあくびをしていたり、ぼーっとしている子がいる。
- ・ 学習時の姿勢が悪かったり、じっと座ってられない。
- ・ 『気をつけ』の姿勢ができない子がいる。
- ・ すぐに疲れたと言ったり、朝会で脳貧血をおこす子が多い。
- ・ 下校後も塾や習い事などで忙しく、分刻みの過密スケジュールである。
- ・ テレビやビデオ、テレビゲームなどの室内の一人遊びを好み、外遊びをしない。
- ・ 野球やサッカーなどの特定のスポーツを早期に過度に練習する。 など

中学校では・・・

- ・ 慢性の疲労、低体温の生徒が増えている。
- ・ 体格はよいが、筋力がなくバランスよく発達していない。
- ・ 腕立て伏せや機敏な動きが苦手だから体が硬い。
- ・ ボールが投げられない、特に小さなボールを投げるのが苦手である。
- ・ スポーツクラブ等でできる運動（水泳やテニスなど）は得意だが、その他の運動は苦手なことがある。 など

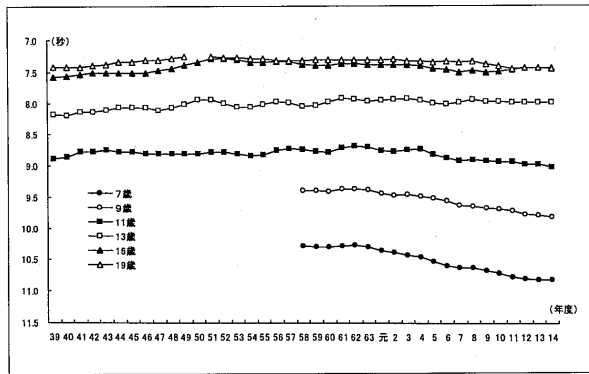
小学校・中学校の体育の授業を参観してみると・・・

- ・ 子どもたちが思わずからだを動かしてみたいという意欲をもっと大切にしたい。
- ・ 小学校高学年になると、スポーツ的な種目が多くなり高度なからだの動きが必要になってきている。
- ・ 中学校のマット運動では思ったよりもからだの硬い子が多く、運動能力の個人差が目立つ。
- ・ 小学校や中学校の教師は、幼児期に運動の基礎を十分につんでいないと感じている。
- ・ 運動することを教え込むような授業内容に見える。 など

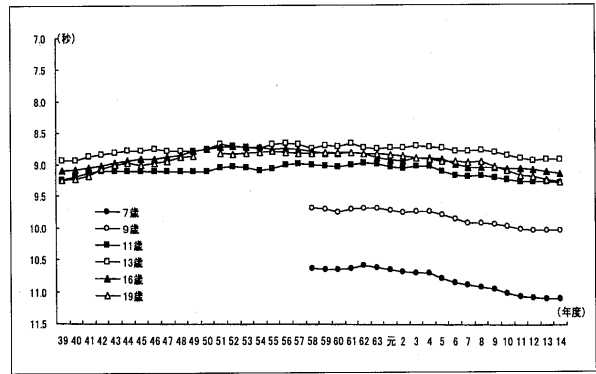
子ども達の体力・運動能力の実態から見ると・・・

幼児を対象にした『体力・運動能力調査』（1997年実施）によると、測定項目（25m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ、両足連続とびこし、体支持持続時間、捕球、往復走）のすべてが前回（1986年）よりも劣っている。特に25m走、立ち幅とび、両足連続とびこしの3項目の低下が目立ち、その差はすでに4～4才半から生じている。このことから、幼児期に体力運動能力を発達させることの重要性を示唆する声も聞かれる。

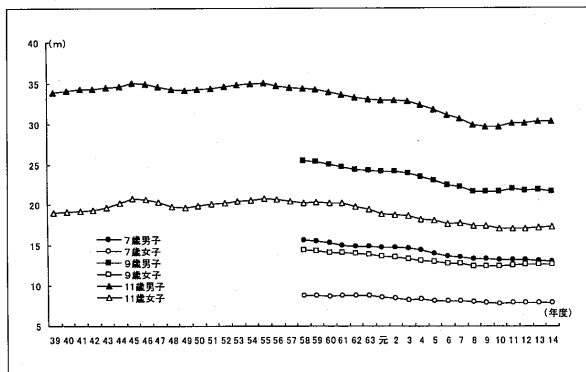
また、児童生徒を対象とした「体力・運動能力調査」においても、子どもたちの体格は向上しているにもかかわらず、体力・運動能力は、昭和60年頃から現在まで低下傾向が続いており、深刻な状況である。特に、走る、跳ぶ、投げるという基礎的な運動能力が低下傾向にあり、50m走の場合では、7歳、9歳で顕著に低下している。小学校低学年の児童の走力が年々低下していることは、幼児期の走力が低下していることでもあり、幼児期に元気に走りまわる経験が少ないためとも言われる。一方、幼児期（特に5、6歳時）に運動能力に優れた幼児においては、思春期発育期における体力・運動能力の発達が著しい傾向があり、すなわち幼児期にからだを十分に動かすことの重要性を示唆している。



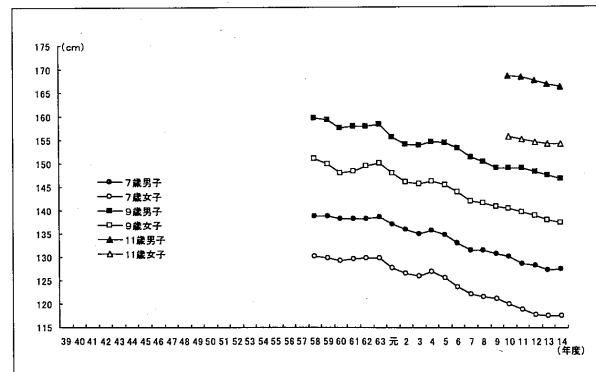
<50m走の年次推移 (男子)>



<50m走の年次推移 (女子)>



<ソフトボール投げの年次推移>



<立ち幅とびの年次推移>

子どもの生活環境の実態から見てみると・・・

子どもを取り巻く生活環境は、都市化、少子化、電子化、洋風化等により、自由に遊べる場所や時間の減少、ビデオやテレビゲームの普及、受験戦争の激化等がおこり、子ども達の体力の低下や生活リズムの乱れ、肥満傾向児の増加、生活習慣病の低年齢化など、新たな問題が生じている。豊かな食生活で体格の向上はみられた反面、子どもの好みに合わせた献立のために、栄養のバランスの偏りや、高カロリーのスナック菓子や清涼飲料水を好んで摂るなど食生活が乱れており、現代の子ども達はからだの内面から変わってきている。一方、家庭や地域においては、子ども達のからだの異変にはさほど関心を示さず、何事も学校に頼ろうする風習など、意識の低下と共に教育機能が低下しているのが現状である。

このように、各発達段階にかかわる保育士・教師達からの話や、また体力・運動能力測定結果のデータから、また子ども達を取り巻く生活環境の変化の実態からも明白なように、子ども達のからだは異変しておりからだを動かす経験が極端に不足していることは深刻な問題である。この現状の中で、今こそ幼児期に大切に育てていくべきことを真剣に考えなければいけない時期であるし、子ども達がのびのびとからだを動かす経験を、園が保障していかなければならなくなっている。しかし、本附属園の幼稚園・小学校・中学校の場合では、「子どものからだの動きがなんか変！劣っている！」とそれぞれが感じながらも「からだの動き」のテーマでお互いの教育観等について話し合ったり、お互いに子どもたちを見合い実態を知るといことは今までなされなかった。そこで、まずは小学校の体育主任と連携し、専門的な視点で幼稚園の子どもたちのからだの動きの実態をさぐっていくことにした。

2. 小学校の体育主任から見た本園児のからだの動き

幼稚園では、単にからだを鍛えることだけを目的としているのではなく、幼児が思わずからだを動かしたくなるような環境の中で自発的にからだを動かして心を開放し、楽しさや心地よさを

6月7日 月曜日

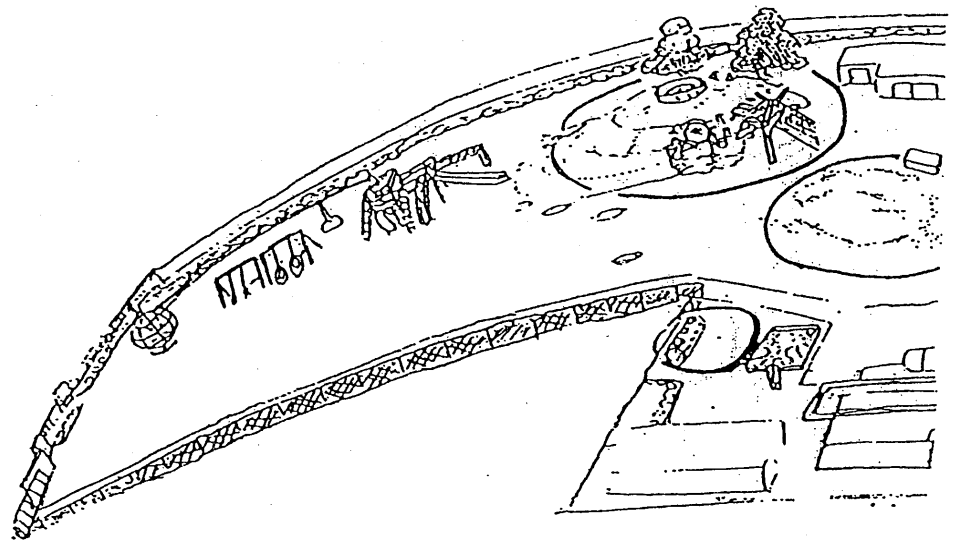
天気 雨

年長・中・少

ね ら い	<p>① とんだり登, たりころがったりしながら, 心を開放して体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。</p> <p>② 友達と一緒にの雰囲気の中で友達のや, ていることをまねたり, 自分なりにやってみたりしながら, 自分なりに体を動かすことを楽しむ。</p> <p>③ 登, たり, ぶらさかたり バランスをとったり 体全身を使って様々な遊びにかかわりながら, 何度も挑戦したり 自分たちなりのやり方を考えていく。</p>
時間	<p>幼児の活動 環境の構成 指導上の留意点</p>

8:45

登園



(まはぐみ(年少組))

マットの山で

先生や友達と一緒に遊びながらとんだり登, たりころがったりする楽しさが味わえるように子供たちの動きにたじて組み合わせ方をかえていく。また体を動かす心地よさを味わったりマットの感触を楽しんだり体を動かしながら場を見立てられたりできるように先生自身が楽しく遊んだり, ツメにたたりしながら楽しい雰囲気をつくっていく。

11:10 年少降園
11:20 年中降園
11:30 年長降園

感じることをねらいとしているが、体育の専門的な視点からみるとどのように写るのであろうか。そこで、隣接されている附属小学校の体育主任に幼稚園での子どもたちの活動の様子をみてもらう機会を設けた。

幼児の記録

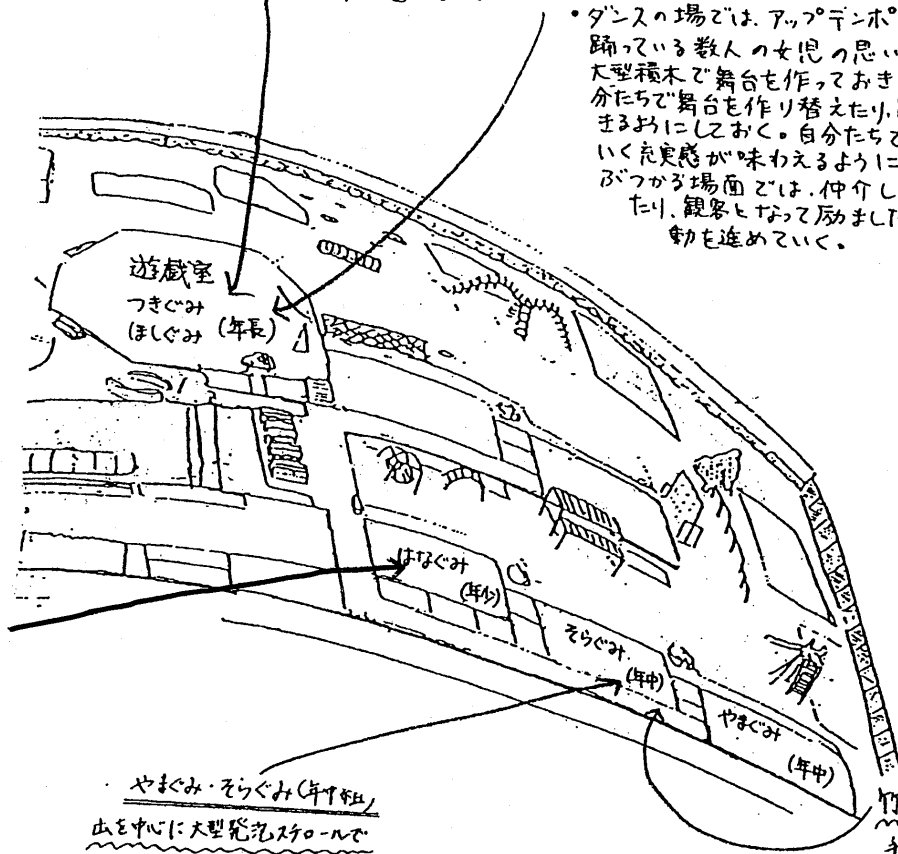
反省・考察

ほしぐみ・つきぐみ(年長組)

固定遊具に自分たちの思いを込めて、伊-ジエって前庭全体がスポーツクラブになっており、鉄棒・ハンゲリングで新しいわざを考案したり、綱かけなどバランスをとる楽しさを叩きつたり木登りに挑戦したりしている。子どもたちが雨でも体を動かす心地よさを味わえるように、遊戯室の中に環境をつくっておく。

- ・傘棚では、いろいろなすべり方を楽しめるようソリになるマルチパネルの部品を置いておく。

- ・鉄棒では、目標を見つけやすいよう技の見本の掲示物も置いたり、写真を撮りながら励ましの言葉をかけられるようにし、子ども達同士で"ルール"の確立や新しいルールの提案ができるよう巧技台を組んでおく。
- ・長縄の場では、気持ちを整えたり大勢でかかわる楽しさを感じたりできるように、子どもたちの様子を見ながら任せられるコーナーが増えた時点で教師がかわっていく。
- ・ダンスの場では、アップテンポの曲に合わせて踊っている数人の女児の思いが続くように大型積木で舞台も作っておき、それをヒントに自分たちで舞台を作り替えたり、踊りを考案したりできるようにしておく。自分たちで踊りを創り、いく気実感が味わえるように互いの思いがぶつかる場面では、仲介したり一緒に踊ったり、観客となって励ましたりしながら活動を進めていく。



やまぐみ・そらぐみ(年中組)

山を中心に大型遊具スクリーンで登ったり、転がったり滑ったり跳んだり等、全身を動かして飛んだり遊べるよう山を中心に大型遊具スクリーンと組み合わせてものを用意しておく。

また、体を動かすことに抵抗のある子ども、思わずしてはうとて体を動かさずに地をかが味わえる、伊-ジエわかして楽しみながら取り組むのが、教師がワニになる等して教師とやりとりを楽しみながら取り組んでいけるようにする。

(雨)

竹、巧技台を組み合わせて手に置かずに、奇くな作り自分の手が変化していき、楽しさを感じながら、ドリフトや鉄棒に取り組み易い。

自分たちの力の試し、挑戦が「よしよし」等のひりひりの思い「できた！」等のひりひりの思いとで、わくわく取り組むべく、そと、次への意欲(つなぐ)でまた満足感が味わえるようにする。

この日の遊びの中で、次のような子ども達の姿が見られたので紹介したい。

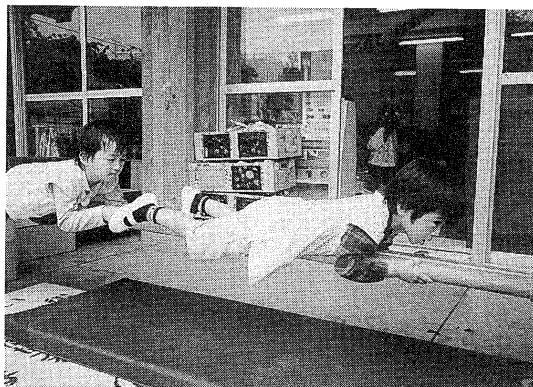
3歳児のエピソード

教師と一緒にからだを動かして（3歳児6月）

ひろしは、入園後からずっと新しい環境の中で不安感が強く表情を硬くしている。ひろしは唯一担任にだけ心をひらき、担任の手をずっと握ったままで一日を過ごしていた。この時期は教師や友だちと一緒に遊びながら、からだとかからだに触れ合い戯れることでからだや心の緊張感がほぐれ解放感を味わってほしいと考え、担任はマットを使った遊びの環境を設定した。

この日も、ひろしは朝からずっと教師の手を握っている。不安そうに目の前のマットを見ているが自分からは動き出そうとはしないで、じっと友だちが遊んでいる様子を見ている。そこで、教師はひろしを連れて一緒にマットの山に登り転がったり、山の上でジャンプしたりしてみた。ひろしは、しばらく教師と一緒に繰り返し、転がってみたり跳んでみたりして楽しんでた。ひろしは、からだを動かすことで少しずつ気分がほぐれてきたのか、徐々に表情がやわらぎ自然に教師の手を離し、一人でマットに登っていくようになった。

教師は、ひろしが何度も挑戦し自信がついた頃を見計らって、今度はマットを島に見立てマットからマットへ飛び移ることを提案するとたくさんの子が遊びに入ってきた。友だちがたくさんいても、ひろしは、にこにこしながら遊び続けていた。



「忍者になりきって」（4歳児）

4歳児のエピソード

手作りの遊具に挑戦（4歳児6月）

からだを動かして遊ぶことに抵抗を感じる子にとって固定遊具は硬いイメージをもつことが多い。そこで、教師は子ども達が何かになりきってイメージの中で遊びながらからだを思わず動かしてみたいくなるようにドラム缶の遊具と竹を使って遊ぶ環境を用意した。

ドラム缶に子ども達が飛びつけば登れる高さに2本の竹を付け、竹と竹の幅は30cmぐらいにした。子ども達は、竹の上を渡ったり足を絡めてぶら下がったりしながら自分なりの方法で遊び出した。

たかやすは、この遊具が目につくと竹にしがみついたり、四つんばいになって竹の上を渡ったり、両手を放して立って渡ろうとしたりといろいろな方法を試した後、両手を広げてバランスをとり後ろ向きで渡することに挑戦し始め、最後まで落ちないで渡りきると「やった！」という表情をして教師を見た。「やったね。落ちなかったね」と声をかけると満足そうにうなずき、何度も挑戦していた。

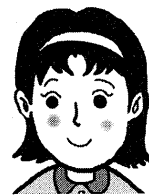
一方、みなこは、保育室の中で思い思いに冠やスティックをつくり「魔法ごっこ」や「お姫様ごっこ」をし、気分転換に廊下の手作り遊具の場を見に来ていた。みなこは自分のお気に入りの「魔法の杖」が完成すると友達と魔法をかけ合い「お姫様」や「魔女」「ネコ」「ウ

サギ」などになって遊んでいた。そのうちに「私はお姫様だけど、魔法を使えるからこれは簡単よ」と魔法の杖を手にしたまま竹を渡り始めた。渡り終えたみなこは、「魔法にかかっているから落ちなかったよ」と教師に告げ、また何度も渡り始めた。このように何かになりきることで思わず挑戦してしまう姿がこの時期には見られる。



何かになりきっていたり、手にいろいろなグッズを持っている子がい
たけれど、からだを動かすのに危なくないのですか？

この時期の子ども達は、自分のイメージの中でなりきって遊ぶことを
好み、自分が作ったグッズをよく手に持ちながら遊んでいるわ。からだ
のバランスを取るのが難しいような時には、教師が声をかけて預かっ
たりするなどの配慮をしたり、また思わずグッズを放して夢中で取り組
めるような環境を用意していきたいと思っています。



5歳児のエピソード

鉄棒を通して友だちに認められて（5歳児6月）

年中時のひろみは、おっとりとした性格で友だちの後に付いて遊ぶことが多く、仲良しの友だちにつられて鉄棒でよく遊んでいた。年長に進級しクラス替えがあり、その戸惑いからひろみは自分の遊びがなかなか見つけられずにいたところに、クラスの数人がちょうど鉄棒をやりだし、ひろみも毎朝迷わずに鉄棒に向かう姿が見られ、教師もその都度励ましていた。6月に入ると「スポーツクラブ」のイメージで、クラスの中でそれぞれにからだを使った遊びが広まってきた。鉄棒にかかわる子たちは、自分でオリジナルの技を考え出し、担任は興味関心をもった今の時期に十分に鉄棒に親しんでほしいと考え、新しい技を紹介するために写真に撮って掲示物を作り鉄棒の近くに置き、他の子たちがいつでも見て挑戦できるようにした。すると、それまで逆上がりは難しいのでなかなかしようとしなかった子も掲示物の写真を見ながら挑戦する姿が増えてきた。

この日、鉄棒で逆上がりに挑戦しながらも、誰が鉄棒が1番得意かという話になり、みかとなつこはお互いに「自分が一番！」と主張しトラブルとなった。お互いに譲らず「自分が1番！」と言い合っていたが、しばらくすると、みかが「ちがうよ！だって一番はひろみちゃんだもん！」というとなつこも納得しうなずいた。毎日鉄棒のところに行き地道にいろいろな技に挑戦し、逆上がりができるようになったひろみの姿を友だちが認め、また、友だちから認められたことでひろみも自信をもち、普段の生活の中でも当番活動を張り切るなどいきいきした姿が多く見られるようになった。

小学校の体育主任の不思議？ 驚き！ 発見！！

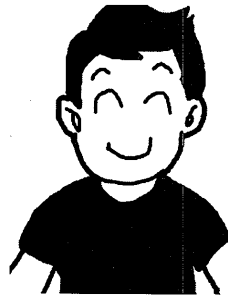
幼稚園と小学校は同じ敷地内にあり隣接しているが、小学校の体育主任が『からだの動き』の視点で幼稚園の子ども達の遊ぶ姿をじっくりと見るのは初めてのことで、いろいろな不思議や驚き、発見を多々感じたようです。

子ども達が一斉に同じ活動をしていないのが不思議でもあり、新鮮に見えました。

3才、4才、5才と活動内容の違いがあるのがわかりました。思っていたよりも活発にからだを動かしていて驚きました。

跳んだり、逆さになったり、回転したりなどの動きをこわがらない幼児期にたくさん経験させることが大切です。

いろいろなところで「先生、見て！見て！」と声をかけられました。できた自分を認めてほしいという欲求が強く、教師が認めてあげることで励みになっていました。



小学校の体育主任

鉄棒の逆上がりの指導では、手首の回し方がうまくできない子には、まず鉄棒を下から握らせると楽にできて自信がつきますよ。

幼稚園での運動面でのカリキュラムがよくわからないのですが、各学年のねらいはあるのでしょうか？

3才、4才、5才といろいろなからだの動きをしているが、はたしてどんな力がついているのかが不明確な感じがします。



子ども達の身体の発達特性や発達の課題について、幼稚園と小学校が一緒に考えていくと、子どものからだ面での育ちを連続してみていくことができると思うのですが・・・



幼児期のからだの動きや運動遊びのあり方は・・・

今回、初めて幼稚園を参観して、幼児期のからだの動きや運動遊びのあり方についていると考える機会となった。

子どもは本来からだを動かすことが大好きであり、小・中学校のように決まった時間割が定められていない園生活の中では、その機会が十分に保障されている。特に幼児期は、運動神経系の発達が著しく、バリエーション豊かな身体活動を伴う運動遊びを経験させるために、この時期に適切な遊びや環境を子ども達に提供していくことが肝要である。運動遊びは、単に身体面だけでなく知的・情意面・社会面といった子どもの心身の成長をはかり、その後の小学校、中学校における体育の学習にとっては重要な要素である「動けるからだ」の基盤をつくると考えられる。これらのことを踏まえ、幼稚園教育における身体活動を伴う運動遊びを、今後もより一層積極的に取り入れていってほしいと思う。そのためにはいくつか課題がある。

子ども達は、鉄棒があればぶら下がったりからだを振ったり、跳び箱があれば登ったり飛び降りたり、マットがあれば這ったり転がったりとこれは自然な行動（運動欲求）である。これらの遊具（固定施設）での遊びは、全身運動につながる基となる柔軟性・瞬発力・敏捷性・巧緻性などが養われると同時に平衡感覚・リズム感などを高めるのにも有効である。そこで子ども達に自発的に運動遊びに取り組めるように常時これらの運動遊具を整えておきたい。特に年長児になると園内の運動施設では物足りないのではないだろうか。そこで隣接した附属学校園の利点を生かし互いに運動遊具を利用し合ってもよいのではないか。幼稚園児が小学校にある鉄棒や雲梯、登り棒、ジャングルジムなどの固定施設や運動場、体育館などを利用したり、小学生が幼稚園の遊具、例えばからだのバランス感を高めるスクーターやホッピングなどを利用したりすることで幅広い運動環境が可能となる。さらに同じ場で共に遊ぶことで、幼稚園児は小学生にあこがれをもち刺激や助言をもらったり、一方小学生は幼稚園生がいることで教授行動を伴う有機的な交流が図られ、相乗効果が期待できるであろう。ただし運動遊びを行う場合には、単なる遊びと終わらぬためにもそれぞれの教師がその運動遊びのねらいを十分に把握しておく必要がある。特に幼児時の遊具を用いた運動遊びでは、多様なからだの動きを経験させ、からだを動かす心地よさや楽しさを十分に味あわせてほしい。また、運動遊びへの意欲の原動力となる「できる」「伸びる」といった技能的なレベルへ発展させていければ、さらに、その取り組みへの姿勢は活性化されると思われる。そのためにも、教師は小・中学校の体育参観などを含んだ研修等を実施し指導技術のコツを学んだり、外部の専門家（小・中学校の体育教師や大学の保健体育科学生のボランティアなど）を積極的に活用していくのも一つの方法である。

今回幼稚園を参観して、身体活動を好み何にでも意欲的に取り組めるこの時期に、さらに全身的な運動機能の発達がもっとも著しいこの時期に、運動遊びの習慣化を図っていく必要性を感じた。そのためにも、今後このような幼稚園参観を増やすと同時に幼稚園や小・中学校と「からだの動き」をキーワードとして更なる連携を図っていくことが望まれる。

小学校の体育主任の専門的な刺激を受け、幼稚園では・・・

近年の子ども達のからだの育ちの異変や体力・運動能力調査結果などからみても、幼児期のあり方の重要性が問われている。しかし、からだの動きが鈍い、運動の経験が少ないからといって、幼稚園でスポーツクラブのような運動をさせたり、鍛えることを目的とした活動をさせることがよいはずはない。幼稚園では、子どもの発育・発達に応じて、思わずからだを動かしてみたいくなるような環境を用意し、からだを動かす楽しさや心地よさを十分に経験することを大切にしている。また、教師や友だちと一緒にからだを動かすことで、自己の存在感や充実感を感じ、自信をもって生活できることをねらいとしながら、自分の運動能力を知り自分に見合った動きができるなど、やがては危険を予知できる行動がとれるようになってほしいと願っている。

今回、小学校の体育主任が幼稚園参観をし様々な不思議や驚き、発見をし、それらを基に話し合いをもち、専門的な刺激を受け、幼稚園の教育をいくつかふり返る契機となった。

まずは、日ごろ子ども達は遊びの中で様々なからだの動きをしているが、専門的な視点から見ると、いつの時期にどのようなからだの動きをすることが幼児のからだの発達にとってより効果的なのか？ その遊びでどのような運動的機能が育っているのか？ やがてこれはどんな運動機能につながっていくのか？ などの専門的な知識があいまいであったようである。私達は、時期に応じた子どもの身体の発育発達や身体的特性をきちんととらえ、それぞれの発達時期に応じた適切なからだの動きを適時に経験させていかなければと感じた。

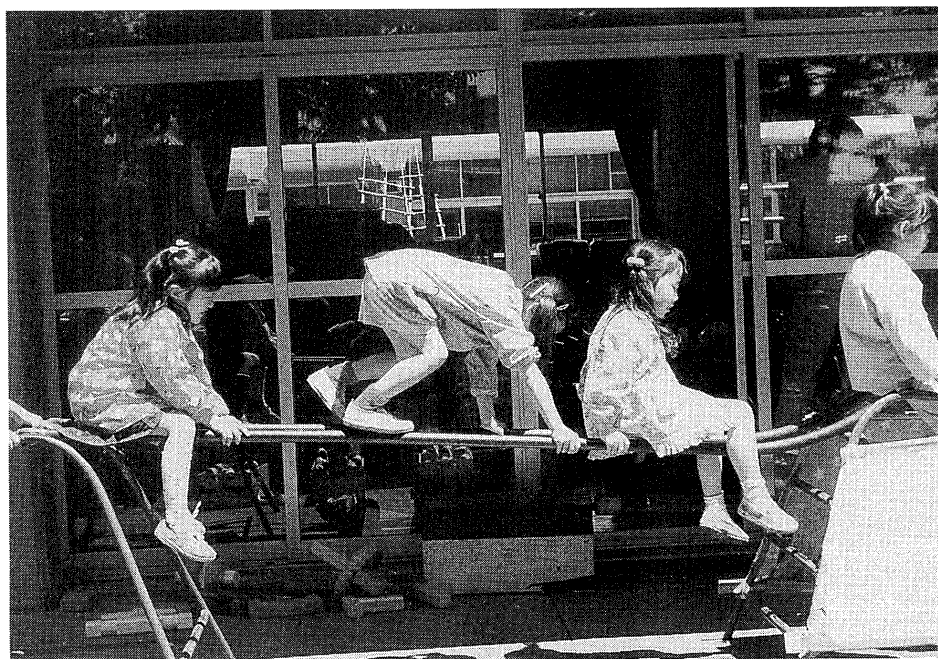
次に、この日、体育主任は遊んでいる子ども達に「もっと高くジャンプ」「ここまで跳んでごらん」など具体的な目標をあげて声をかけていた。それに応じ子ども達は得意気に何度も繰り返してからだを動かしていた。「すごいね」「できたね」という結果を誉めるだけの援助では、一人一人のからだを動かしたい欲求を十分に満たし、充実させ、より発展させていくことは不足ではないかと感じた。最近、教師自身が遊ぶ経験が少なく遊びのレパートリーも乏しくなっているのが実状である。小学校の体育主任から、鉄棒で逆上がりをする時の手も持ち方（順手と逆手のもつ意味）を紹介してもらったように、保育の中に専門的な技術のヒントや意見が入ることで子ども達の遊びが広がったり、深まっていく手がかかることを感じた。

また、現代の子ども達は、からだの動きの面での個人差があると感じている。そうした中で、特にからだの動きがぎこちない子や外遊びが嫌いな子にとっては「何が原因となっているのか」「どんな動きが苦手なのか」を見極める視点やその子の課題を明らかにし、個に応じた適切な援助をしていく必要があり、それが私たちの課題でもある。幼児期のからだの動きは可塑性があり、変化が早いという利点がある。そこで、状況によっては外部の専門的な視点を取り入れて多数の目で見えていくことも大切であろう。

今後は、中学校の体育主任や大学の専門教官をも交えて、10月の運動会に向かう子ども達の姿や1月の学年末の子ども達の姿を専門的な立場から見合い、さらに子ども達のからだの動きについてともに考え連携を図っていきたいと思う。

3. 身体の発達特性と発達の課題について共に考える

子どものからだの発育・発達は、連続しているのである。しかし、これまでは身体の発達特性や発達の課題について一連の成長の流れに沿って考えたことはなく、幼稚園、小学校がそれぞれの教育課程のもとで実施していた。今年度は、まずは3歳（年少時）～7歳（小学校低学年）までの身体の発達特性と発達の課題の一覧表を共に作成することを通して、『からだの動き』という視点からの様々な問題点を見つけ出して、それを共有していきたいと考えた。現在も、内容を検討ながら加除訂正をしている途中である。今後は、これを小学校中・高学年から中学校へとつなげていき、この表を共に作成することを通して子ども達の発達特性や発達の課題を一連の流れで考え『からだの動き』の面で連携をはかっていきたい。



「落ちないようにね」（5歳児）

幼児期から小学校低学年の発達特性と発達の課題一覧表(案)

	幼児期前半(3～4歳前期)	幼児期後半(4歳後期～5歳)	発達特性	発達課題と留意点【】	発達特性	発達課題と留意点【】	低学年(6～7歳)	発達課題と留意点【】
身体的特性	<ul style="list-style-type: none"> 頭部・胴・下肢が不均衡な発育状態で、運動を支配している神経系統の発達が未熟で転倒しやすい。皮下脂肪があまり丸みをおびた幼児独特の体型である。 大筋の運動能力が著しく発達し、走る、とぶ、ころがる、ボールを投げるなど全身を使った動きが、かなりスムーズにできるようになり、からだをコントロールしながらかんたうとする。 腕の力を使った運動(例えば雲梯、低鉄棒など)にはまごちんあさがみられるが、くり返すことでもうまくなるといふ意欲がでてくる。 ボールを投げる、受けるなど目と手の協応を伴う活動に興味をもち、積極的にやろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身長、体重が向上し、神経系統の発達が著しい。身長伸びと共にお尻独特の体型が徐々に変化してくる。 走る、とぶ、投げるなどの大筋を使った運動が力強くできるようになる。 雲梯や鉄棒などの体のバランスをとるなど、鉄棒や雲梯などの体のバランスをとるなどの調整力や持続力、巧緻性が芽生えてくる時期である。 手先の細かい作業など、根気よくていねいに取り組む姿勢がみられ、用具や道具もうまく使いこなす。 	<ul style="list-style-type: none"> 雲梯や鉄棒などの運動用具や、縄跳び、ボール、リレーごっこなどのいろいろな遊びを通して、多様な体の動きを身に付ける。 いろいろな体の動きを挑戦したり、自分なりに何度か試したり工夫したりしながら遊びとうとする。 おももそうなる遊びや友だち得意なことに触れながら、自分の遊びの刺激としていく。 【一人ひとりが自分の力を十分に発揮して遊べるよう、場の取り方や時間、道具、直接的援助等に配慮していく。】 	<ul style="list-style-type: none"> 身長、体重ともに安定した成長。体型は細身で、頭や胴体に比べて下肢は短い。 幼児の持つ皮下脂肪は減少してくる。 生理的湾曲が形成される。 身体的活発さがこの期の特徴。静かな姿勢の強要は姿勢障害、運動衝動の妨げ、興奮うつ鬱の原因となる。 体位感覚(回転、逆さ、高所)の発育大。 柔軟性大。女子の肩・膝・股関節の柔軟度は最高。 走る、跳ぶ、這う、よじ登るなどの全身の・基礎運動能力の発育大。特に走運動は、この時期の児童にとって基礎となる運動。 投げる、捕るのようにな小筋調整能力は、まだ発達が小さい。 単純な音楽リズムに簡単な動き(手拍子、歩行、走)を合わせられるようになる。 骨の外力に対する抵抗力は弱い。 	<ul style="list-style-type: none"> 逆さ姿勢の運動に適している。 小刻みな時間配分による活発な運動遊び 固定施設や器具を用いた遊び。 柔軟性を維持する運動。 変化に富んだ走る、這う、跳ぶ、転がる、よじ登るなどの運動。 大きめのボールによる投げる、捕る運動。 リズムの働き取りと運動反応の適切な訓練。 【強い衝撃が加わる運動は避ける。】 変化に富んだ計画的な運動課題。 			
知的特性	<ul style="list-style-type: none"> 先生や友達のやっっていることをまねたり、自分なりにやってみようとする。 好きな遊びの中でその子なりのイメージをわかして遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりに見通しをもって遊ぶようになる。 成功感や達成感を味わうことではりきる。 危険がわかかって、自分の行動を調整していく。 友だちと刺激し合えないがら体を動かす楽しさを味わっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びを通して危険な場所や危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動できるようにする。 基本的な生活習慣を身に付けることの大切さに気付く、自覚する。 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。 【生活や遊びの中で起こるけがや病気を自分自身の体に関心をもち、やがては健康にも関心がもてるようになる。】 【友だちと一緒に工夫しながら遊びを作っていくような遊びの環境を工夫する。】 	<ul style="list-style-type: none"> この時期でも運動課題の把握とその遂行能力は持っている。ただし、同一課題への集中時間は短い。 課題の達成度より運動すること自体に興味がある。 学習への動機付けは遊戯的動機づけを優先する。 うなものが効果的。 走ったり、跳んだり、よじ登ったりする運動を好み、ボール運動の初歩的技術に興味を示し始め、水遊びには強い関心を示す。 音楽や歌を伴うリズム運動に興味を示す。 創造力旺盛で模範的な遊びを好む。 教師への心理的依存心が強い。 				
社会的性	<ul style="list-style-type: none"> 友達の中で簡単なルールがあることを知って、それを守って取り組もうとする。 教師や友だちと触れ合い、安心感を持つ。 友だちの動きを感じて自分の動きをきめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己中心的な行動が減り、次第に協同的な遊びができるようになる。 目的に向かい友達や先生と話ししたり考えたりしながら遊んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びをより楽しくするために自分たちでルールをつくりつくり変えたりして遊ぶ。 友だちと遊びのルールを確かめ合ったり、自分達の目的に向かっているいるに工夫しながら遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己中心性がまだ強く残っており、自己主張が口論やけんかになりやすい。 共同的な遊びには簡単な決まりがなければならぬことに気付く。 自主的な行動は周囲の援助がなければ長続きしない。 グループ遊びは少人数を好み、また、チームゲームには興味を示さない。 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども同士で最低の混乱やけんかが起きないよう、最低の決まりを約束させる。 【子ども達に最低の責任を持たせると同時に、最後まで見届ける。】 【個人的活動を中心に、グループは少人数で。】 			

5. 今後の課題

(1) 『からだの動き』の連携プロジェクトの立ち上げと組織化

近年の子ども達のからだの育ちの異変が問題視される中で、今こそ連携を図り子ども達を様々な視点でみていく必要がある。今年度は連携の第一歩として、小学校の体育主任が本園児の遊びの中でのからだの動きについて、専門的な視点からみた。今後は、中学校の体育主任や大学教官をも交えて『からだの動き』プロジェクトのメンバーを構成し、幼稚園や小学校、中学校間で保育や体育の授業、学校園生活などでの子ども達のからだの動きを見合い、3歳（年少時）～小学校～中学校の12年間のスパンの中で子ども達の身体の発達特性や発達の課題についての一覧表を作成するなどを通して『からだの動き』をテーマにチームを組んで連携を図っていきたい。

(2) 子どもの身体発達の連続性

日々、子ども達は成長発達をしておりそれは連続しているものであり、幼稚園、小学校、中学校と学校は変わっても子ども自身に変わりはない。子どもの発達を一貫した流れの中でとらえるために、幼稚園で子ども達が遊びの中で自発的・主体的に培ったからだの動きを、小学校へ滑らかに移行し、やがては中学校へと続く流れとして形成していきたい

また、幼稚園においても幼児の生活がいきなり3才や4才から始まるのではなく子ども達は連続した育ちの中で日々生活していることを忘れてはならず、入園前の子どもたちについても目を向けなければならない。入園前の子ども達のからだの発達状況はどうか？からだの動きはどうか？など家庭での生活について知ること、その後の保育の組み立て方も工夫する必要があるだろう。

からだの動きを育てることは、幼稚園でスポーツクラブの様な運動を奨励したり、小学校教育の先取りをすることではない。小学校に入るまでに幼児期にふさわしい教育を行いながらからだを十分に動かし、その後の発展として小学校教育を位置付けていくことを再度確認していきたい。

幼児の教育2004年11月号の中で、森 司朗氏は、「幼児は、自分で課題を見つけ、課題を達成するための活動を行っている。この課題を達成したときに、幼児は有能感を感じ、新たな挑戦に挑んでいくのである。幼児期はこの有能感の多くを運動の経験を通して体験しているのである。幼児の運動能力が低下していることは単に幼児が運動をしなくなったのではなく、子どもの主体的に課題に取り組む「運動遊び」をしなくなったことを意味しており、この点が幼児期以降の発達に大きな影響を与えていくことになる。（たとえば、ここでの経験が学習の前提条件になる興味や関心を持って取り組む力を損ねさせていくのである。）」と述べている。このことから、私たちは、幼児期以降の発達を見通して幼児期にふさわしいからだの動きを経験させていかなければならない。

(3) 教師間の相互理解

入学（入園）前や卒業（修了）後の子ども達のからだの育ちの経過を知らないというのではなく、『からだの動き』のテーマで、校種間の教育観、子ども観について教師同士が本音で

話し合い、子どもたちを見合うことでお互いの教育のあり方について理解することが必要である。その結果円滑な接続が可能となる。また、幼稚園も遊びの中でからだのどんな動きが育っているのか、幼児期の何を大切にしているのかなどの子どもの育ちが見えるように小学校や中学校の教師に発信していくことも大切である。

特に身体発達では、個人差が大きく、2～3年の幼稚園時代では十分に修正できずに小学校に送り出さなければならない場合などは、その後も小学校で継続してきめ細やかに見ていって欲しいと切に願う時がある。教師間の子どもの発達課題や、援助の仕方が共通なものになるための相互理解を図る手がかりとして、身体の発達特性の一覧表を活用していきたい。

(4) 幼稚園のオープン化

幼稚園内に外部の専門的な新たな視点が入ることで幼稚園の生活が豊かになり、子どもたちの世界が広がっていくことを感じたと同時に、私達は幼稚園で日々行っている保育や教育内容をもっと外部にアピールしていかなければと思う。また子ども達は幼稚園や学校内だけでなく家庭や地域の中で生活をしている。『からだの動き』のテーマで単に幼稚園・小学校・中学校とたてにつながるといっただけでなく、今後は子ども達を取り巻く家庭や地域にもなげかけ総合的に子ども達を育てていくことも必要になってくるであろう。

また、子ども達の遊ぶ環境が減少している現在では、園庭開放の実施などで「からだを動かす場」としての役割も重要になってきている。園内の施設での異年齢児の集団遊びや親子でからだを動かす場として、地域に生きる幼稚園としてのオープン化も図っていきたい。

(岩淵)



「竹馬大好き！」(5歳児)